

連載 プロマネの現場から

第 139 回 長江・東シナ海の汽水域

蒼海憲治 (大手 SI 企業・上海現地法人・技術総監)

10月に入り、上海蟹の美味しい季節になりました。そのせいか、日本からの出張者が多くなっています。もちろん、来訪の理由は、上海蟹のためだけでなく、予算や決算の時期でないことと、中国現地の顧客訪問、中期計画策定のための事前の議論や、中国各地で開催される各種のセミナーに参画するためです。

初めて上海を訪れる出張者を上海市内の有名な観光地に案内する場合に行くところというと、老街の雰囲気を味わえる豫園、ウインドーショッピングを楽しみながら散策できる南京路、そして、金融センターの超高層ビルを眺めることのできる外灘が定番のスポットになります。このうち、外灘は、金融センターのある浦東と市内の浦西が、黄浦江という大きな河によって隔てられています。

この黄浦江は、上海の南北に約100キロにおよび、遊覧船だけでなく、様々な荷物を積んだ巨大なコンテナ船やバルク船などが、ひっきりなしに行きかっています。しかし、この大きな黄浦江は、長江の支流になります。

先日、この黄浦江の北端にある、長江との合流地点まで行ってきました。これまで、武漢・重慶・成都といった長江沿いに発展した街、そして雲南省にある長江の上流まで見てきましたが、東シナ海の間近にある上海の長江を見たのは、初めてでした。目の前に広がる、対岸の見えない、想像以上に大きな長江の大きさに驚くとともに、世界第三位の規模の川であることを再認識しました。

そして、この長江の河口を眺めながら思い起こしたのは、「汽水」という言葉でした。

「汽水（きすい）」とは、海水と淡水とが混じり合っている塩分濃度の低い水を指し、海と川の水が交じり合う深く入り込んだ湾や河口部を、「汽水域」といいます。

この「汽水」の水の豊かさが、漁業にとっても、さらにその上流の人々にとっても、大切になります。

このことにいち早く気づき、「豊かな海を守るためには、豊かな森を守る必要がある」ため、川の上流の森に木を植える「森と海は恋人運動」という運動があります。この運動を30年前から主導されているのが、気仙沼でカキ養殖をされている漁師の畠山重篤(はたけやま しげあつ)さんです。

以前、植林をする漁師さんがいるという話を耳にしたことはありましたが、その際は、不思議に思いつつも、そのままその理由を理解しないままにしていました。この春、畠山さんの講演会を聴かれた方から、その取り組みとお話に非常に感動したということを知ったので、畠山さんの著作を手に取り、その取り組みをいまさらながら知り、そして正直、驚きました。

以下、畠山さんや「森は海の恋人」運動をご存知の方は多いと思いつつ、その取組を紹介したいと思います。

海が汚染され、赤潮が大量発生する。その際、海をきれいにしようとしても、海と山とは全く関係がないと思ったままで、海だけを見て対策を打とうとしても上手く行きません。

たとえば、気仙沼の場合、海が汚れている原因を辿っていくと、海の上流である大川の水源が荒れていることがわかりました。水源の雑木林が戦後の植林政策により、杉ばかりになっており、下草が生えないため、雨が降ると、泥水になり、それが川へ流れ込み、海が汚染しているのです。

この気仙沼湾で、長年、カキやホタテの養殖をしていた畠山さんは、気仙沼湾に注いでいる大川の上流にある山や森林が、海の生き物たちに影響を与えていることに気づきます。

海の生き物たちにとって必要な条件は、魚のための食べ物がたくさんあることです。魚のための食べ物がたくさんあることが、魚にとっての「豊かな海」になります。

では、魚のための食べ物とは何か。大きな魚にとっては、小さな魚ですが、その小さな魚にとっては、動物プランクトンや海藻になります。動物プランクトンは、植物プランクトンを食べます。

この植物プランクトンや海藻が育つためには、窒素やリンが必要不可欠になります。

そして、植物プランクトンや海藻が、この窒素やリンを吸収するためには、鉄分が必須になります。

しかし、植物プランクトンや海藻は、この鉄分をそのままでは吸収できません。

鉄分を吸収できるようにするためには、この鉄分を「フルボ酸鉄」という成分に変化させることで可能になります。

つまり、植物プランクトンや海藻は、このフルボ酸鉄を吸収することで、窒素やリンを吸収でき、成長することができます。

このフルボ酸鉄が作られるために必要なのが、山や森林が豊かであることになります。

山や森林には、木々から沢山の葉が地面に落ちる。この葉が微生物によって分解されると、腐葉土になりますが、この腐葉土が作られる過程で、フルボ酸という成分が発生します。

このフルボ酸が、土中の鉄分と結びつくことで、フルボ酸鉄が生まれます。

このフルボ酸鉄が、川によって海に運ばれ、それを吸収して植物プランクトンや海藻が成長し、その植物プランクトンや海藻を食べるために、魚たちがやってきて豊かな海になります。

つまり、豊かな森が、豊かな海とその生態系を作っていることになります。

「川は川，山は山，海は海のことだけを考えるのではなく，自然は全てつながっていることを知る」ことの重要性を認識させられます。そして、森が生む鉄分から、広大な海の世界連鎖を作っていたということを知る時、深い感動に代わります。

この「森は海の恋人」運動、最初から答えがわかって始められたものではありません。試行錯誤と工夫の日々だった様子が、畠山さんの著作を通して伝わってきます。その根っこにあるのは、「やってみなはれ」の精神です。特に、他の誰もやらなくても自分から始めるという気持ちです。この「やってみなはれ」の精神、何事をするにも大切だと思います。

ところで、畠山さんは、実はとても長江に縁がある方でした。戦前、畠山さんのお父さんは、上海で兵役除隊になったといいます。その後、船舶運営会という船会社の連合会組織に勤務します。そして、畠山さんは、昭和18年、「揚子江の水で産湯を使った」というように、長江沿いの南京から少し上流にある芜湖（ウーフー）で生まれます。

戦後、命からがら気仙沼に戻り、畠山さんのお父さんは、水産養殖場を創業し、カキの養殖を始めました。それが、畠山さんの仕事になりました。

長江は、東シナ海を豊かにする汽水になっています。

この広大な長江の河口を眺めながら、この川が東シナ海の生死を握っていることに、思いを巡らせるのでした。